

史跡赤穂城跡

二之丸東櫓台・西中門跡の発掘調査

赤穂市教育委員会

1 赤穂城跡の整備

赤穂城は、正保 2 (1645) 年に常陸国笠間 (茨城県笠間市) から入封した浅野長直が、13 年の歳月をかけて寛文元 (1661) 年に完成させた海岸平城です。石垣土塁、堀を中心とした縄張り遺構がよく残されていることや、甲州流軍学による工夫が随所にみられることから、昭和 46 (1971) 年に国史跡に指定されています。

城は櫓 10 箇所、門 12 箇所、枡形 5 か所が設け

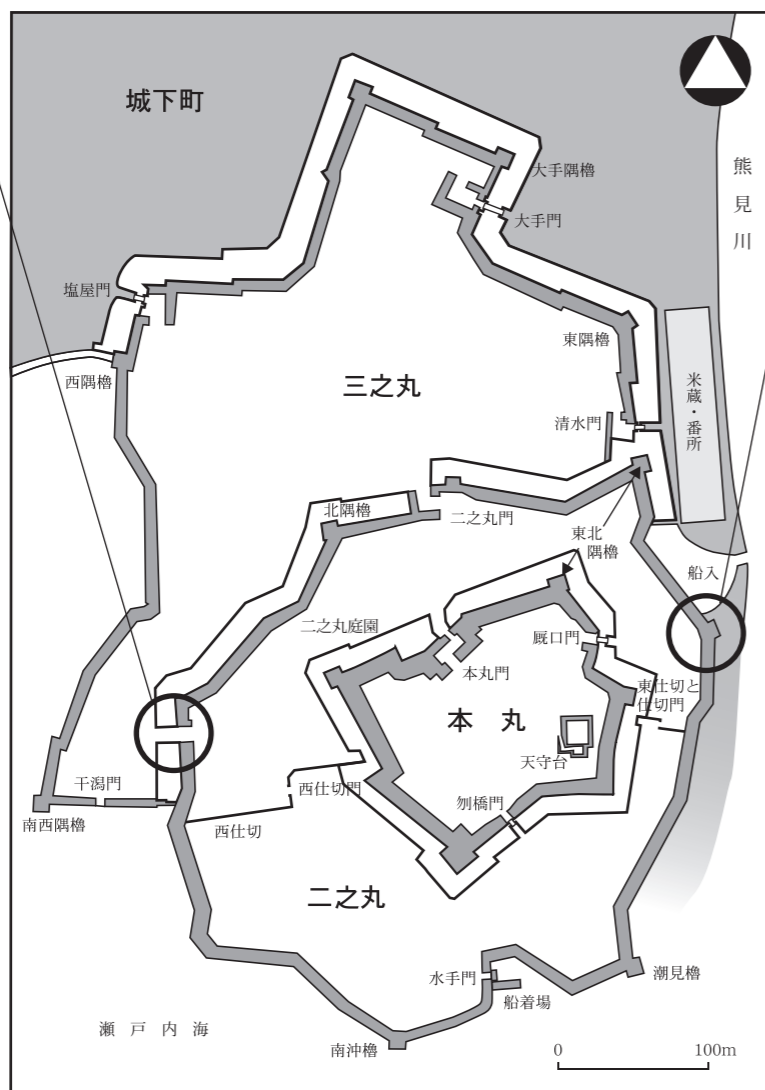
られて防備の要としていますが、明治維新後、櫓や門はすべて失われてしまいました。昭和 30 年代に三之丸大手隅櫓が整備されたほか、平成になってから本丸門や厩口門、大手門枡形などが整備され、現在は国名勝旧赤穂城庭園 (本丸庭園・二之丸庭園) のうち二之丸庭園の重点的な整備を平成 14 年度より実施するとともに、二之丸東部城壁の修理を行っているところです。

二之丸西中門跡

西中門は、藩主御殿のあった本丸を守るように取り囲む二之丸の西端にあたる門で、国名勝二之丸庭園の西の出入口にもなっています。

この門に関する古記録はほとんどなく、詳細は不明でした。

平成 6 年度と 12 年度に、区域を分けて発掘調査が行われていましたが、このたび全容把握のため再調査を行いました。



二之丸東櫓台

櫓とは、戦の武具を保管しておく施設であるだけでなく、物見や籠城の際に拠点となる施設で、櫓台は櫓を支える石垣です。

赤穂城内に 10 ある櫓のうち、ほとんどは二階建ての「二重櫓」でしたが、二之丸東櫓は一階建ての「一重櫓」でした。

瀬戸内海を臨みながら熊見川河口部に位置するという場所にあつて、それほど高い施設が必要なかったのかもしれませんが、すぐ北側にある赤穂藩の米蔵と船入の周辺を監視するための拠点として、重要な役割を持っていました。

2 二之丸東櫓台の発掘調査

(1) 絵図からみた二之丸東櫓台



①『赤穂加里屋城図』(花岳寺蔵)

- ・明治初年に写されたものであるが、元図の年代は不明。
- ・櫓は一重で「東西三間一分 南北四間」と記載されている。
- ・一間=六尺五寸換算と推定される。

櫓の東西：三間一分=610.5cm
櫓の南北：四間 =787.8cm



②『浅野家時代赤穂城之図』

- ・大正11年刊『赤穂義士碑文集』に添付された絵図。明治27年に旧藩士宅より絵図を複写したものとするが、底本の制作年代は不明。
- ・櫓は「東西三間壹尺五寸 南北四間壹尺五寸」と記載されている。
- ・一間=六尺換算と推定される。

櫓の東西：三間一尺五寸=590.8cm
櫓の南北：四間一尺五寸=772.6cm



崩落した石垣

当時は熊見川河口にあたり、瀬戸内海に面していました

二之丸東櫓台 発掘調査状況の正投影画像

(2) 二之丸東櫓台の発掘調査成果

二之丸東櫓台は、近代になって櫓の西側の土塁が削られて畑地となり、それが原因で裏側の石垣が崩壊しました。

北側の一部は、樹木にもたれかかって完全には崩れていないものの、南側は大規模に崩壊したものです。今回は、櫓台の西側の構造を明らかにするとともに、その破損状況を調査するため、発掘調査を実施しました。調査面積は約 150 m²です。

東櫓台の東側はよく形を残していましたが、西側については石垣が崩落している様子がわかりました。石垣の内部に込められた「裏込め石」が大量に見つかり、その激しさを物語っています。しかし、逆に崩落していたために、櫓台の上部に盛土がされてい

ることがわかるなど、新たな事実も明らかになりました。

絵図には、櫓の規模が東西約 6m、南北約 7.8mと記載されていましたが、発掘調査でもそれを追認する結果となりました。さらに石垣の一番上の石(天端石)には、櫓の土台を安定して据えるため、石材を加工した痕跡が見つかったことから、土台木材の一辺の大きさ(約 21 cm)までが判明しました。

また発掘調査の結果、櫓台の西側は当時から石垣が4段分しかなく、それより下は土で築かれていたこともわかりました。

今後は、このような発掘調査から得られたデータを活用し、櫓台の復元案や、修理方法の検討などを行っていく予定です。



櫓⇒

三之丸大手隅櫓は二階建てなので「二重櫓」と呼ばれます。今回調査した二之丸東櫓は一階建ての「一重櫓」です。

櫓台⇒

櫓の規模によって礎石の配置も異なりました。現在のところ、二之丸東櫓以外で、心柱のみを礎石とした建物跡は見つかりません。

参考：赤穂城跡三之丸大手隅櫓（櫓は昭和 30 年再建）



木製土台を据えるための石材加工痕跡が見つかりました

瓦や壁材がたくさん出土しました

櫓の隅の石垣が、形を保ったままずり落ちてしまった様子がよくわかります

「輪取り」がされていたと推定しています

櫓の心柱礎石

櫓の上面には土が盛られていました

崩落した櫓台石垣の石材

櫓の土台

石材の形によって、櫓台石垣のどの部分の石垣だったのかが、よくわかります

0 5 m
S=1:50

二之丸東櫓の復元案

3 二之丸 西中門跡の発掘調査

(1) 絵図から西中門周辺



①『赤穂加里屋城図』（花岳寺蔵）

- ・明治初年に写されたものであるが、元図の年代は不明。
- ・西中門は高麗門形式のように描かれ、門の寸法が書き込まれている。
- ・「西中門 高二間三分 幅二間一分」
- ・西中門と北袖石垣の間に折れの表現があり、「一間」「一間半」と記載されている。
- ・西中門と南袖石垣の間に折れの表現があり、「一間」と記載されている。
- ・門前は土橋であったことがわかる。
- ・一間=六尺五寸換算と推定される。

②『赤穂城内土屋鋪間数之図』（花岳寺蔵）

- ・昭和6年の写しであるが、元の絵図は元禄15年に永井直敬が赤穂藩主となり赤穂城の引き渡しを受けた際に龍野藩から引き継いだものという。
- ・「西ノ門」と記されているが、門の形式はわからない。
- ・門前は土橋となっており、土橋の南側護岸(図では下側)から城壁脇の柵につながる部分には、道のような線が描かれている。
- ・二之丸庭園側に橋が描かれている。

門の高さ：二間三分=450.0cm 一間 =197.0cm
 門の幅：二間一分=413.6cm 一間半 =295.4cm



西中門跡 全景写真

(2) 二之丸西中門跡周辺の発掘調査成果

西中門の発掘調査は、約 200 m にわたって行い、門だけでなく土橋遺構が発見されました。西中門の橋は、堀の上に架けられた木橋ではなく、堤状の土橋でした。

土橋の土塁（玉縁）

橋の両側には、外堀の護岸と連続した護岸石垣が見つかりましたが、南護岸は北護岸に比べて栗石の幅が広く、単なる護岸ではなく高さのある土塁（玉縁）があったことが判明しました。

江戸時代、南側の堀は海と連通しており、敵が攻めてきた時に入りにくくするために、土塁が築かれていたのでしょう。

西中門

西中門周辺の発掘調査では、残念ながら門部分が後世の掘削によって大きく破壊を受けていましたが、かろうじて礎石 1 基だけ残されていました。この礎石は玉砂利によって念入りに根固めされており、その位置から高麗門の控柱礎石であることがわかりました。ほかの柱礎石は残念ながら残っていませんでしたが、絵図の検討と発掘調査から、門の位置を割り出すことができました。

また、門の北袖石垣側は二之丸外堀から連続して堀状となっており、その構造についても検討しました。

(3) 西中門の位置の割り出し

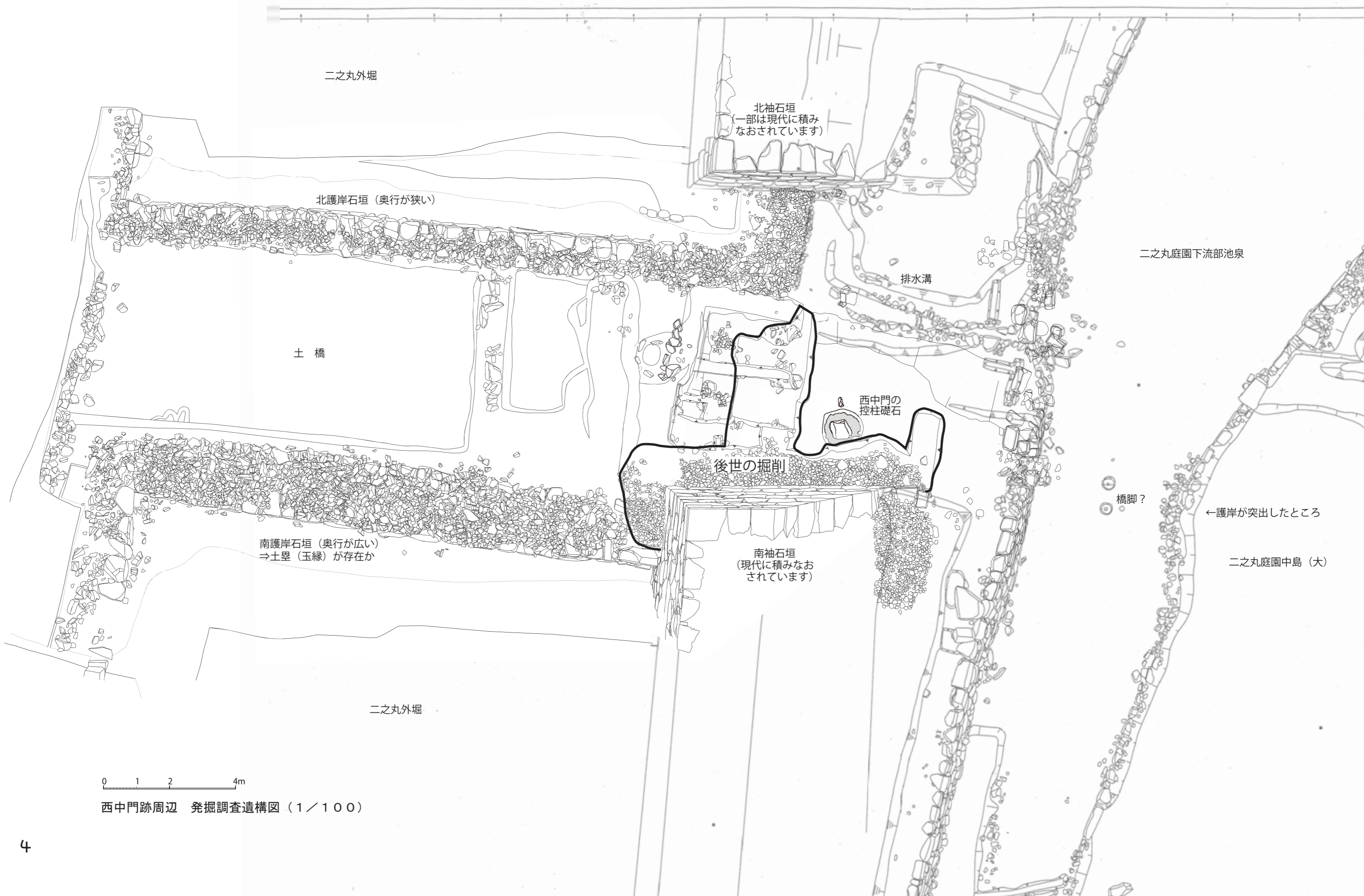
- (1) 前頁の絵図①には、門幅が二間一分つまり約 410 cm と記載していました。控柱も同じ幅で建てられていたはずなので、北側に 410 cm ほど（実際には柱の幅等があるので広めに設定）の位置に控柱礎石を想定すると、すでに溝によって破壊されている場所に該当しています。
- (2) 絵図①の門幅である約 410 cm は、門の開き扉 2 枚を合わせたものに近い数字であることは、間違いありません。
- (3) 控柱と鏡柱の距離は、門を開いたときにちょうどぶつからない距離にあるのが一般的です。つまり鏡柱は、見つかっている控柱礎石から、205 cm 以上離れているはずですが。
- (4) 見つけた控柱礎石の根固めは、玉砂利によって念入りに行われていました。そうすると、門扉を支えた鏡柱の礎石の根固めは、これと同等か、それ以上の根固めが行われていたはずですが。しかし、発掘調査でこうした根固めは見つかりませんでした。これは、後世の掘削部分に、

- 鏡柱礎石があったということの消極的な証拠になります。
- (5) 後世の掘削部分に入り、控柱礎石から 205 cm 以上離れ、かつ江戸時代の距離法（尺寸）に基づいた場所を検討した結果、門の位置をおおむね割り出すことができました。
- (6) 北側に推定された控柱の位置には、深いところに板石が残されており、根固めの痕跡の可能性が考えられました。
- (7) 推定された門の北側には栗石が集中していますが、これは土橋から続いた護岸石垣で、堀が深く入り込み、門のところでL字状にまがってぶつかるのであれば自然な形状です。
- (8) このような複雑な構造は、絵図①の門両脇に「一間」「一間半」「一間」と記載された土塀があることから、妥当だと考えられます。
- (9) さらにこのような幅の狭い土塀の場合、土塀に狭間（さま、鉄砲等を撃つ穴）が付き、後ろに雁木（階段）ができるのが一般的です。

(4) 橋の位置推定

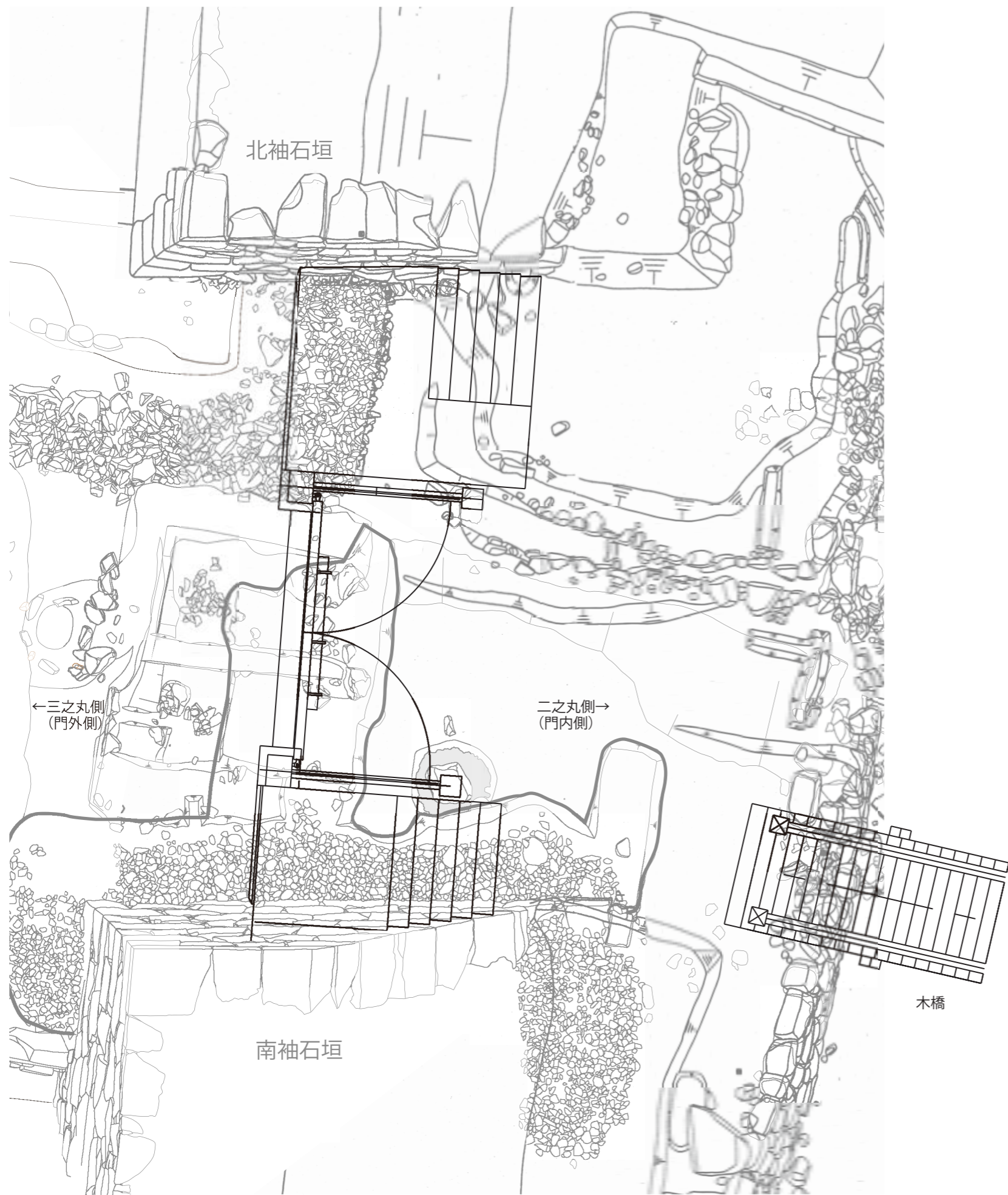
絵図②には、西中門の内側の二之丸庭園の池泉に橋が架けられていたことが描かれています。絵図だけではその構造は不明ですが、山鹿素行が舟遊びをした記録から、舟がくぐることのできた木

製の反橋であると推定され、護岸の形状から、最短距離で結んだ場所が最も適切であることから、橋の位置も推定できました。

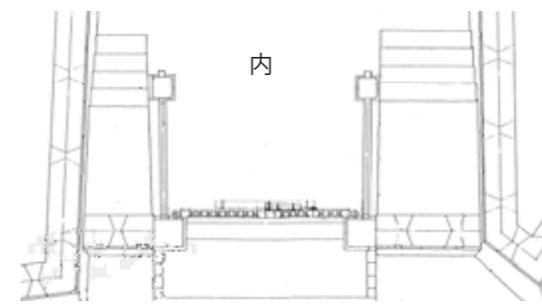


0 1 2 4m

西中門跡周辺 発掘調査遺構図 (1/100)

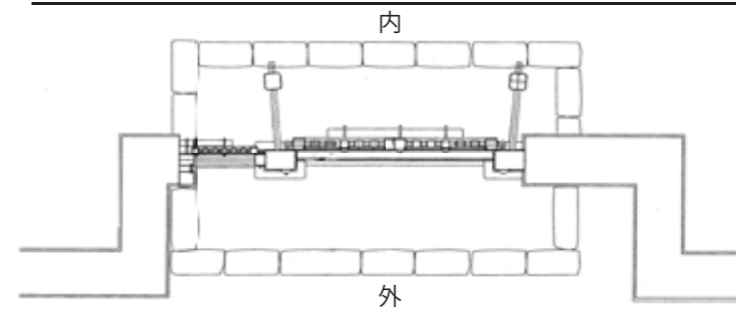
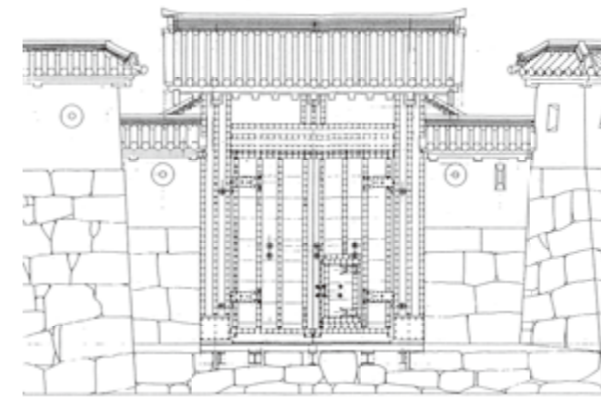


西中門周辺 復元案 (1/150)



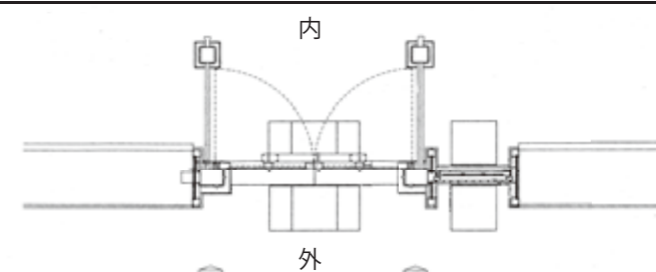
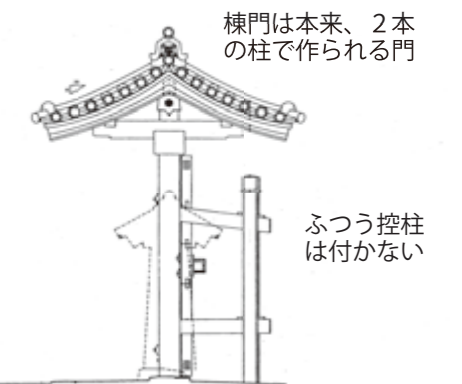
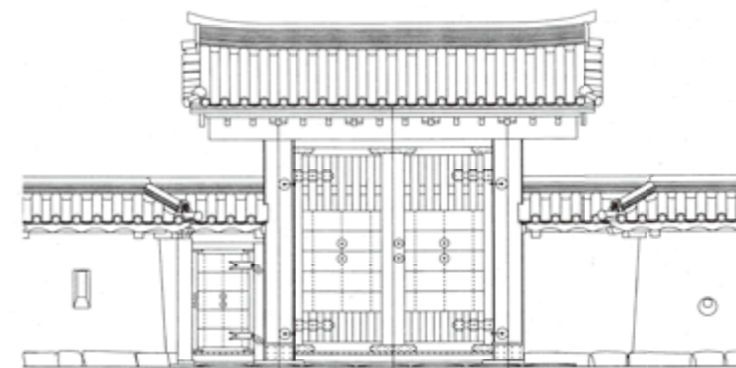
高麗門 (厩口門)

←外 内→



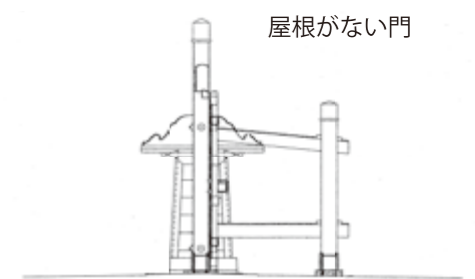
棟門 (西仕切門)

←外 内→



冠木門 (二之丸庭園表門)

←外 内→



赤穂城跡における門の類例